

次にあげる発声曲は、TOTI DAL MONTE によるものである。

Mi-e vo-ci-, mi-o Di- o Mi-e vo-ci, mi-o Di o. vie- ni al- l'al ba.

次はM. TERESA PEDICONIによるものである。

Tie- ni lama --- no, A-mo-remi --- o.

その他

u- navol- ta pe- r se- m - pre (後にも先にも只一つ)

pie- taMA- RI- ASAN- TO. Buon gior- no (今日は!)

Buona se- ra. (今晚は!)

O' Soá -ve fan- ciúlla. Buona no- tte. (おやすみなさい)

Buon Via- ggio. (ご旅行のご無事を)

Ⅲ お わ り に

以上、いろいろあげて見たが、日数、時間の制約もあり、レガート唱法、スタッカート唱法、声区の転換、クレッシェンド、ディミヌエンド、切分音、歌唱感の把握などを系統だてて分けて説明するまでには至らなかった。しかし、これ等は、授業及び、コーラス練習時に実践して、かなりの成果を上げたものを、列記したものである。

A-O

támo 愛する
parola 言葉
barocco バロック
barone 男爵



una pa-roleda mo re.
 ウーナ, パ ローレダ モ レ
 (愛の一言)

A-U

paúra 恐れ
pàusa 休止
làuro 月桂樹

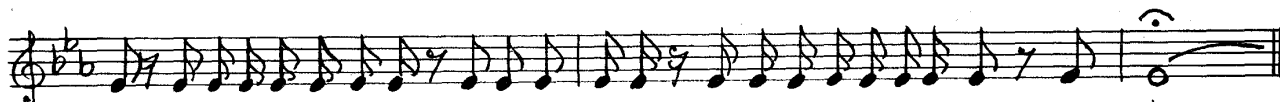


pa.....ú - ra pà - u - sa.

口唇、及び額面の緊張を解くイタリア語の利
 用。



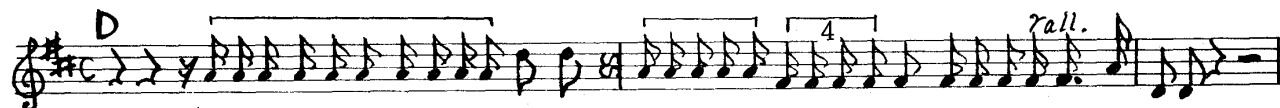
A-veMa-riapie-nadi gra-zia, e - let - ta fra le spo-se e le ver-gi-ni sei



tu, sia:be-ne-det-toil frut-to obe-ne-det-ta, di tue ma-ter-nevi-sce-re, Ge - sù.

この言葉は、Verdi 作曲オペラ「Otello」の
 中の、有名なデズデモナーのアリアで使用され
 ているが、教会では一般に祈りの言葉として唱

えられているものである。この場合、呪文のよ
 うにならず、はっきり母音を言い直すように発
 音させたい。



Alt-ro-di menonlesa-pre-i nar-ra-reso-nolasuavi-cinachelavienfuoridoraaimpor-tu-na-re.

これは、puccini のオペラ「ラ・ボエーム」の中のミミのアリアの最後の部分である。



u - na vo-ce lon - tan lon - tan,

「Addio!」 Tosti 歌曲より



Dal - l'az-zur-ro del ciel sten-di la ma no

「Ave Maria」 Tosti 歌曲より

何れの場合も、一番楽に出易い音より始め、
 半音ずつ上行、下行させていくのが望ましい。

又、メリスマ的に工夫して見るのも大変面白
 いものである。



何れの場合も、始めの一音に二つの母音を言い、終りの音までの音は全て、重なったあとの母音を刻む。例えば、*Fiamma* の場合、



他の単語の応用

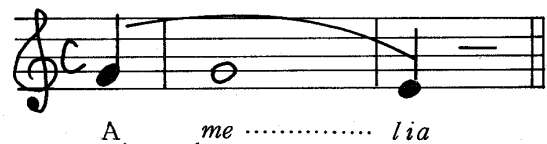
A - A

amato 愛する
catania 地名(イタリアの)
capanna 小屋
magari そうだったら良いのに
mamma 母



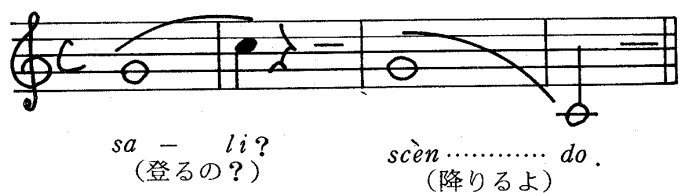
A - E

Amelia 人名
maestro 教師
maestà 尊厳
grave 重い



A - I

guài それ見たことか
ahimè あゝ!
bàia 冗談
salire 登る
malia 眩惑



アクセントをもつもの

mi-o, tu-o,

接頭語 (ri-)

Ri-alza-re, Ri-anda-re

子音に導かれる (i)

libreri-a patri-a

他にも発音するのに若干、制約があるが、ある程度指導者は、理解した上で行なって欲しい。

例1、A・E・I・O・U・に子音をつける、MA-、NA-、SA-、TA-、など、生徒にとって一番楽に出し易い音から、呼吸を調整させながら出させる。

MA ME MI MO MU MAME MI MO MU MA A ME E MI I MO O MU U

MA A ME E MI I MO O MU U MA A ME E MI I MO O MU U

NANNEN NANNEN NANE NANE NANENANE NANE NANE NA-

例2. 二重母音を使う。

(i) I-A

Fiámma 焰

Fiába 嘶話

Fiáto 呼吸

Biáncó 白

Cantiamo 歌おう

(ii) I-E

Tieni 持つ

Miéle 蜂蜜

Chiésa 教会

Ciélo 空

Uieni 来なさい

(iii) I-I

⊕ (子音をはさむ)

Finito 終了

Minima 二分音符

Sinistra 左

(iv) I-O

fióre 花

chióma 髪の毛

maggióre
より大きい

(v) I-U

fiúme 河川

chiúso 閉める

piúma 羽根

注、イから他の母音に移行させる意味は、閉口音から開口音に向かうにメガホンのように、比較的、スムー

スに掴み易いと思うからである。例にあるように、イからイの場合、二重母音にはならないが、子音をはさみ、二つめのイにアクセントを置くことによって、軟口蓋を意識出来る。

A- Fig m ma Fig m ma Fig m ma

E- tie ni tie ni tie ni

I- fini to fini to fini to

O- chio ma chio ma chio ma

U- piú ma piú ma piú ma

(2) VOCALI (母音) と CONSONANTI

(子音)

アルファベットのうちの、A、E、I、O、U、は、母音をあらわし、あと16字が子音をあらわす文字である。仏語や英語のように、一つの母音が、幾通りにも発音することがなく、日本語と同じく発音するから、容易に読むことが出来る。

日本語の発音と同じく、母音の *a* は最も広く口を開け、次に、*e・o*、一番狭いのが、*i・u* である。又、その中の、*e* と *o* は、開閉両音をもつ。単語にアクセントのおかれぬ、*e* と *o* は閉音である。図にあらわすと

開口音 (強母音) *a* $\left\langle \begin{array}{l} \text{ò - ó - U} \\ \text{è - é - i} \end{array} \right\rangle$ 閉口音 (弱母音)

のようになる。

子音の発音では、閉鎖音の *p・b* は両唇を使う。*t・d* は歯にあてて発音する。軟口蓋を使う *k・g*。鼻音の *m・n*。側音で歯茎を使って出す *l*。同じく歯茎を使い巻舌、顫動音 *r*。摩擦音、唇歯音 *f・v*。*S・Z* は歯茎を使って出す摩擦音。破擦音 *ts・dz*。

以上のように注意を要するものがある。

子音の16文字は23音からなっている。次の表がそうである。

16文字23音 音価

発音例

b	b	[b]	ba	be	bi	bo	bu
c	c, ch	[k]	ca	che	chi	co	cu
	c	[tʃ]	-	ce	ci	-	-
d	d	[d]	da	de	di	do	du
f	f	[f]	fa	fe	fi	fo	fu
	g, gh	[g]	ga	ghe	ghi	go	gu
	g	[dʒ]	-	ge	gi	-	-
	gl	[gl]	gla	gle	gli	glo	glu
		[λ]	-	-	gli	-	-
	gn	[ɲ]	gna	gne	gni	gno	gnu
h	h	[-]	-	-	-	-	-
l	l	[l]	la	le	li	lo	lu
m	m	[m]	ma	me	mi	mo	mu

n	n	[n]	na	ne	ni	no	nu
p	p	[p]	pa	pe	pi	po	pu
q	qu	[kw]	qua	que	qui	quo	-
r	r	[r]	ra	re	ri	ro	ru
	s	[s]	sa	se	si	so	su
	z	[z]	sa	se	si	so	su
	sc	[ʃ]	-	sce	sci	-	-
t	t	[t]	ta	te	ti	to	tu
v	v	[v]	va	ve	vi	vo	vu
z	z	[ts]	za	ze	zi	zo	zu
		[dz]	za	ze	zi	zo	zu

注 この表に於ては、武蔵野音楽大学のテキストによるものである。

(3) 今回、発声訓練に効果的と目す、二重母音 (*dittonghi*) と (*trittonghi*) について。

単語中、一度に発音しなければならない、二重母音・強母音 (*a・e・o*) と弱母音 (*i・u*) との結合、そして弱母音のみの結合。

イ、初めの母音を強く発音する

mai, noi, voi ……等

ロ、後の母音を強く発音する

uomo, fiore, ieri ……等

ハ、弱母音のみ

piuma, giusto, fiume ……等



ニ、三重母音の場合、間の強母音を二つの弱母音でささえる。

guai, miei tuoi vuò



ホ、二重母音とならず、切って発音される重複母音 (*iàto*)

i・u を含まない語

te-a-tro, be-a-tificare.

イタリア語を使った発声指導

笹 嶋 眞 夫

Su alcuni suoni vocalizzi.

by Masao Sasagima

I はじめに

自然体で無理のない、発声・歌唱は、見、聞く方にとっても楽であることは、言うまでもない、が、いざ、その発声を伴う歌唱力を、身につける為には、地道に練習する以外、方法はないようだ、なぜなら、一般に、歌うことは、特別な発声法によるものと、思われているからである。

本来、自然な欲求より生まれた歌唱は、自らの喜び、悲しみを、素直に表現したのが始まりであって、特別な訓練を必要としていない筈なのである。

幼児期より、自然の中にあって、自由に声を出す機会の多い地域では、話し声も籠らず、美声の者が多い。反対に密集地に住む者は、足音を忍ばせ、音声も極めて小さく、低音は比較的楽に出すことができるが、中音域より上は、仲々出にくい者が多いようである。環境が、スムーズな音声をせばめているといえる。

幼児期より、歌唱に興味をもち、歌うことの喜びを知っている者に比べ、ある程度、年を経た後からの訓練は、非常に時間がかかる。

そういうわけで、一度出来上がってしまった、歌唱、発声法を変えるには、従来の発声法を、そのまま使っても、余り進歩は望めないのではないか、一般に、母音で行う発声法が多いが、かえって、喉を開き過ぎたり、喉を詰めたりして、逆効果な面が多いことに気がついた。

だが、山(YAMA)、川(KAWA)のように、子音を伴う単語を使用することによって

比較的楽に声を出すことが出来る。

しかし、語学の面、それに我々が受けついで来た、日本の伝統音楽は、ヨーロッパの歌曲に比べ“歌いもの”でありながら、語りの要素が強く、一字一音がはっきりしていないと理解させにくい、つまり、一度、身についたもの、覚えたことを、白紙に戻すことは、非常に困難であることから、自国語以外、つまり、日本語に、音声表記するのに困難でなく、容易にROMA字に転記出来、読み方も楽である、ITALIA語を使った発声法を作ってみた。

II イタリア語について

(1) ALFABETO 現在、使われている、イタリア語のアルファベットには21文字ある。

A [a]	N [ɛnne]
B [bi]	O [O]
C [tʃi]	P [pi]
D [di]	Q [ku]
E [e]	R [ɛrre]
F [ɛffe]	S [ɛsse]
G [dʒi]	T [ti]
H ['akka]	U [u]
I [i]	V [vu] [vi]
L [ɛlle]	Z ['zɛta]
M [ɛmme]	

他に外来語や古語などに使用される5文字がある。

J [i'lungo]	Y [ipsilon]
K ['Kappa]	W ['doppio vu]
X [iks]	